

民俗学のこと

私は大学受験のときに、日本史の問題で「おかげまいり」と「ええじゃないか」について400字以内で書きなさい」という問題が出て、まったく歯が立たなかったことを今も鮮明に覚えています。

そんな私が民俗学という言葉始めて知ったのは大学に入ってからで、当時は民族学とは違う学問だということもあまりわかっていませんでした。民俗学は、日本の生活文化や伝統行事、民間信仰などを主な研究対象にするのですが、私が習った宮田登先生は、妖怪の話をよくしていました。民俗学の研究者としては、柳田國男、折口信夫（おりぐちしのぶ）、南方熊楠（みなかたくまぐす）、和歌森太郎などが知られています。

大学の民俗学の実習では、岐阜県の飛騨地方にいて合掌造りの家屋をみたり、東京の池上本門寺に泊まって朝の読経に参加したりしました。飛騨の山奥の村に行ったときに、「このあたりの村落の人たちはどうやって生計を立てていくのでしょうか？」と引率の芳賀登先生に聞いたら、「周囲の町や村と寄りかかり合いながらやっていくんだよ」と答えられたのが印象に残っています。いわゆる「花見酒の経済」というもので、近いところでモノを回しながら、小さいながらも経済の動きを生み出して地域社会が成立しているのです。

近代化と都市化の中で、徐々に失われつつある農村の文化や庶民の習俗をしっかりと見つめることで、現代の私たちが忘れがちなことを気づかせてくれるようなところが民俗学にはあります。

たとえば、ハレの日とかハレ着という言葉があります。これは民俗学の研究によれば、日常的生活・時間を「ケ」と呼びますが、ケを続けると「ケガレ（ケ枯れ）」てくるので、非日常の「ハレ」の生活・時間を過ごしてケガレを吹き飛ばし、再びケの生活が続けられるように、日本人の生活・時間は組み立てられているとのこと。ハレの生活・時間とは、たとえば地域のお祭りであったり、結婚をはじめとした人生の節目の儀式であったりします。学校でいえば、教室での教科学習が「ケ」であるとすれば、体育祭や遠足などが「ハレ」ということになるでしょうか。

そんな民俗学の研究分野の一つとして、山の中の狩猟生活で生きる「サンカ」と呼ばれる人々のことがあります。山中にテントのような簡易住宅を作って住み、鳥獣を狩猟して食料としたり、蓑、竹細工、木製の椀などを作って農民と交易をしたりする人々で、第2次世界大戦後すぐの頃には、まだその存在が確認されていました。縄文時代からそれほど変わらない生活スタイルを続けてきたのだと思います。東北地方の山間部で狩猟を生業（なりわい）として暮らす「マタギ」と呼ばれる人々のことは、映画になりました。

東京の目黒区駒場に、日本民藝（民芸）館があります。柳宗悦（やなぎむねよし）が日本各地から収集した日常使いの陶磁器や木製品などが展示されています。柳宗悦は民俗学者とは言われませんが、教科書に出てくるような美術工芸品ではなく、名もない職人が作成した日用品に美を見出していくところは、まさに民俗学の視線といえます。一度は行ってみたいですよ。（近くに日本近代文学館や東京大学の駒場キャンパスもあります。）

NO. 52で「物語の歴史の先におもしろいものがある」と書きましたが、民俗学が切り拓いた研究分野もその一つといえると思います。